



# コミュニケーション / 文通

## 日本のお友だち、お元気ですか

オーストラリアの子どもたちにとって大切なことは、日本語を通じ、日本の伝統文化や年中行事だけでなく、同じ年代の日本の子どもたちがどのような生活をし、なにを考えているかを知ることだ。小学生のレベルで日本を理解するには、オーストラリアの子どもと日本の子ども同士の交流が重要だろう。手紙は実際にコミュニケーションの役割を果たし、生きた日本語教育にもつながる。また実際に文通することで児童たちは日本への関心と理解を深め、広い視野を育てることができると思う。将来「あいうえお」は忘れても、日本の子どもと文通した経験は忘れないだろう。



吉田 芳子  
Yoshida Yoshiko  
ベルモント州立小学校  
(オーストラリア、クィーンズランド州)

### 目的

#### 言語面の目的

自己紹介ができるようになる。  
質問の方法、答え方を習得する。  
家族、学校、地域社会などについて説明できるようになる。

学習する機能	学習する表現	学習する語彙
<ul style="list-style-type: none"> <li>❖ 情報を提示する</li> <li>❖ 質問する</li> <li>❖ 手紙を書く</li> <li>❖ あいさつをする</li> <li>❖ ひらがな、かたかなを読み、書く</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>❖ 私の好きな(食べ物、スポーツなど)は～です</li> <li>❖ 私は(名前、年、学年)です</li> <li>❖ ～は何が好きですか</li> <li>❖ 家族は～人です。あなたは</li> <li>❖ 週末に何をしますか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>❖ スポーツ名</li> <li>❖ 食べ物、飲み物</li> <li>❖ 教科名</li> <li>❖ 家族の名前</li> <li>❖ ペット</li> </ul>

#### 文化面の目的

日本の子どもたちの生活、考えていることなどを理解する。  
オーストラリアでの自分たちの生活を考え、説明する。  
意見を交換する。

## LESSON PLAN

### 用意するもの

日本のスポーツ、学校生活、習慣、行事などを紹介したビデオ

### 授業の進め方

#### LESSON PLAN 1: スポーツ

##### 1. 議論 (10分)

オーストラリアの子どもたちが行うスポーツと、手紙に書かれてきた日本の子どもたちが行うスポーツについて話し合う(黒板にスポーツ名を書き、両方の国で行われているもの、オーストラリアのみ、日本のみで行われているものにわかる)

##### 2. 会話練習 (10分)

例文:

- ❖ わたしはバスケットボールをします。(ペンパル名)もします。
- ❖ サッカーが好きです。じょうずです。
- ❖ にほんのこどもはクリケットをしません / オーストラリアのこどもはすもうをしません。
- ❖ わたしのしゅみは~です。
- ❖ ~クラブに入っています。
- ❖ わたしのすきなスポーツは~です。

##### 3. ビデオ鑑賞 (10分)

日本独特のスポーツや伝統的なスポーツをビデオで紹介する。

#### LESSON PLAN 2: オーストラリアと日本の学校

##### 1. 議論 (10分)

自分たちの学校生活について議論させる。

- 勉強する科目、課外活動、クラブ活動など
- 学校での生活(時間帯、休み時間、友だちとする遊びなど)
- 学校の休み(宿題、休みの過ごし方など)

##### 2. ビデオ鑑賞 (20分)

日本の児童の学校生活を記録したビデオを見る。

##### 3. 会話練習 (30分)

例文:

- ❖ にほんの小学校は / オーストラリアの小学校は ~時から~時までです。
- ❖ 学校でさんすう、こくご、しゃかい、びじゅつ、おんがく、たいいく、りかをべんきょうします。
- ❖ うんどうかい、コンサート、キャンプ、学校さいがあります。
- ❖ ひるやすみになわとびをします。
- ❖ きゅうしょくがあります / ありません。
- ❖ おやつを食べます / 食べません。
- ❖ そうじをします / しません。

#### LESSON PLAN 3: 作文

##### 1. 日本独特の習慣や行事についてのビデオ鑑賞 (60分)

##### 2. 図書館で日本について調べさせる (60分)

##### 3. ビデオや本で調べた内容について議論させる (30分)

- 日本の子どもたちの生活(学校生活、授業後の過ごし方、家庭生活など)
- 宗教(オーストラリアとの比較、神道、仏教、年中行事との関連性など)
- 食生活(日本料理、食習慣など)
- 伝統的なスポーツや文化(特徴やオーストラリア文化と異なる点など)
- 文化の違いと国の違いの関連性など
- エッセイの書き方

##### 4. 作文 (60分)

日本文化について英語で作文を書かせる。

児童が書いた手紙

おてがみ ありがとうごさいました。  
 おげんごですが。わたしは とてもけんごです。  
 じが じょうご ですね。  
 イルモント しょうがこうは 9じから 3じまで  
えいご、せんぱう、しかい、わか、おんがく、たいいく、かいてこ、  
 かんぎょう、せじ、かつ、たい、ご、げんご、しょう。  
 わたしは フットボール と サッカー が すきです。  
 おあきになったら りしこ になりたいです。  
 しょうらい なんに なりたい ですか。  
 またてがみ ちがいてね  
 さようなら。

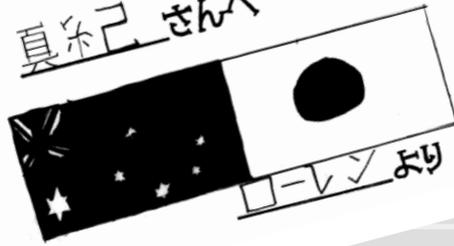


由貴 さんへ



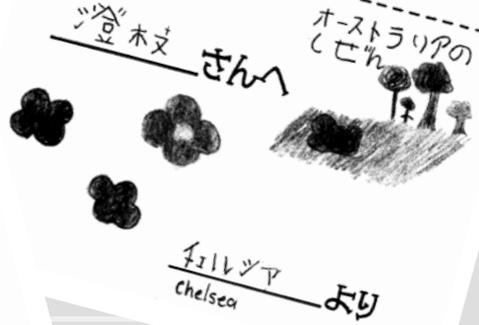
こんにちは 真糸己。⑨  
 おてがみ ありがとうごさいました。  
 わたしは おばたか が いた えがき です。  
 わたしのおとうさんは いろいろな とう  
 ぐをはんばりして います。  
 おかあさんは いそいそ います。  
 わたしはおとうとが います。  
 さいようしん の しごと は なん ですか。  
 またてがみ を ちがいて ね。まて います。  
 バイ!

真糸己 さんへ



こんにちは 澄木文  
 おげんごです。わたしは とてもけんごです。  
 じが みを うけて います。わたしは とてもけんごです。  
 六月のかわりかき七月のほしめまてあけが  
 すみでした。わたしはあなたか"た"いたす  
 たいすていへ"イルモント"は"た"か"た"いたす  
 のしりて"おまたてか"みをちがいてね。  
 さようなら

澄木文 さんへ



## 文化理解と外国語学習について

## 柔軟性のある文化紹介が求められている

オーストラリア社会は、多くの異なった民族、宗教、文化などが、お互いに排斥することなく、共存することで成り立っている。この多文化社会で育っているオーストラリアの子どもたちが日本語教育を通じて、日本文化を理解することは難しいことではないと考えられる。日本料理、盆栽、生け花、日本古来の武術などがオーストラリアの人びとに愛好されていることから見ても、日本文化が子どもたちに受け入れられ、さらにオーストラリア社会に浸透することも可能といえる。しかしオーストラリアとは異なった日本社会で生まれた文化が、子どもたちやオーストラリア社会に受け入れられるにはさまざまな過程を経なければならないこともまた必然のなりゆきといえる。

オーストラリアの社会と日本の社会では、個人主義とグループ志向、多民族と単民族、西洋と東洋などの違いから人びとの考え方や価値観に相違がみられる。社会性は国策、教育、宗教、歴史、そして家族や男性、女性のあり方などにより、それぞれの社会で独自に築き上げられ、そこに住む人びとも大きな影響を与えている。例えば、戦後積極的に西洋の民主主義を導入したことにより、日本社会は大きな変革を遂げたが、依然として東洋の儒教の教えによるものの考え方が根強く生きている。日本社会には美しい秩序があり、日本人は目上の人を敬い、勤勉で礼儀正しく、「和」を大切にす美德を備えている。己の幸せのみを追求することなく、常に相手を思いやる気持ちも忘れない。このことは日本語の敬語にも表れている。しかしこの美しい秩序も西洋の個人主義から見ると違ったものになる。「性、年齢、職業などにより、人びとが社会で暗黙のうちにランクづけられ、縦につながった伝統的な人間関係は柔軟性に乏しく、人びとは常に立場をわきまえる態度を求められる」という捉え方をされることもある。

このように日本社会と大きく異なるオーストラリア社会では日本文化自体がある程度オーストラリア社会に順応することも必要になってくる。実際に世界の文化と

して多くの人びとに愛されている日本文化は柔軟性に富み、かなりの変革も認められる。

日本の伝統文学から、世界文学の一端を担う文学として認知されるようになった「俳句」はその一例であろう。オーストラリアでも多くの学校の英語の授業で俳句作りを取り入れている。音節の母音数で五・七・五とつなげ、英語の俳句をつくる。また教育の場だけでなく、独特の詩として一般市民にも紹介され、「俳句」や「短歌」が日常会話に登場し、驚かされることも珍しくない。「寿司」や「盆栽」と同じように新しい英語となっているのだ。

一方ベルモント小学校での経験に照らしてみると、ほとんどの日本の年中行事はそのままの形でオーストラリアの子どもたちに喜ばれる。これまで経験したことのない異国の文化を、興味深く、また抵抗なく受け入れ、吸収できるのは子どもであるからかもしれない。領事館から借りてきて、図書館に飾ったお雛さまの前で、誰が教えたわけでもないのに正座して鑑賞した子どもたち。飾りのミニチュアの刀が本当に切れるかどうかに関心が集まったりもしたが、雛壇の側で振り袖を着てカメラに向かった少女は、日本の女の子のように穏やかな笑みを浮かべていた。また七夕祭りの短冊にしたためた願いごとに「お父さんに家に帰って来てほしい」というような切実な願いが含まれていても、「神様が私の願いを聞いて下さるかもしれない」という純粋な気持ちに国による違いはない。

このように子どもたちが純粋に自分自身の生活の一部として日本文化を違和感なく受け入れるのを目の当たりにすると、日本語の授業の一環として「学ぶ場」である教室で子どもたちに文化を「教える」ためには、その文化を改めて見つめ直すことが大切である。日本語教育とともに文化を紹介することは、異なったことばの習得に加えて、日本人の国民性を理解する上で大いに役立つ。そのためにも日本文化の本質を十分理解させ、子どもたちが自由に考え、判断できるように柔軟性のある紹介が必要であろう。

## 講評

このレッスンプランでは、手紙を書く前に、文通のテーマが提示され、母語による議論がもたれている。これは、児童の知っていることを活性化させ、興味をもたせる点で大変よい。また、議論した内容をもとに、会話の文型練習が導入され、語彙・文型の導入が行われている。ただ、具体的な練習方法の記述はないが、練習が単純活動のうちに終わってしまわないことを望みたい。また、時間内でどれだけ定着するか若干の疑問が残る。